

## 25年前の映画「あしたが消える」の成果と課題

千葉茂樹 (Shigeki Chiba)<sup>6</sup>

日本映画大学 特任教授

### 1. 映画「あしたが消える どうして原発？」

映画「あしたが消える どうして原発? (以下、『あしたが消える』)」<sup>7</sup>は、今から25年前の1989年5月26日に公開された原発ドキュメンタリー映画である。

ソ連のチェルノブイリ原発事故によって全世界が原発事故に恐怖を抱いた。しかし、国内では関心が大変低かった。2011年3月11日の東日本大震災による福島第一原発の事故が起きるその時までには。

今改めて注目されている原発問題を扱ったこの映画の成果と課題はどのようなものだろうか。どうして日本はこの時に“原発問題”を解決しておかなかったのだろうか。

### 2. 映画「あしたが消える どうして原発？」

「あしたが消える」の映画制作の発端は、1986年にソ連のチェルノブイリで起きた原発事故だった。

1950年、映画監督の新藤兼人・吉村公三郎らが独立プロダクション「近代映画協会」を設立。その一員として、著者も商業主義とはひとあじ違う映像製作に関わっていた頃、チェルノブイリでの原発事故が起きた。若い演出部の千葉茂樹、中島裕、金高謙二、田淵英夫と制作部の3人が、原発に関して「何かしなくては」と感じ、リサーチを始めた。製作資金がないため、制作部の平形則安、溝上潔、里中哲夫が一人100万円を出し合い、制作に取りかかった。

なお、社会への問題提起を試みたこの作品は、2011年3月の東日本大災害以降、マスコミや映画研究誌「シネフロント」<sup>8</sup>などにも多くとりあげられた。日本映画大学にて筆者が2013年より開講してきた「シネリテラシー研究」の教材としても取り上げている。

以下は、「あしたが消える」の内容をまとめたものである。

1986年4月のソ連、チェルノブイリ原発で起こった大事故は世界中の人びとに改めて核の脅威の恐ろしさを見せつけた。リサーチをしていた製作スタッフが朝日新聞のある投書を見つけた。それは、二人の幼い子どもを持つ葛西真紀子さんという女性の投書だった。

真紀子さんの父親は、二十年あまりに亘って、原発の建設保全に取り組んできた。断熱

<sup>6</sup> schiba@eiga.ac.jp

<sup>7</sup> 「あしたが消える どうして原発?」製作 原発を考える映画人の会 1989年公開

<sup>8</sup> シネフロント2011年9月号特集採録シナリオ

関係の技術者で、部下に優しい現場監督者だったという。1984年6月、五十二歳の若さで突然骨ガンを発病し、入院後わずか四ヶ月で急死した。父親の死は、放射線の被曝とは無関係なのだろうか。

「新聞に投書したのは、原子力発電所が反対だとかということではなくって、働いている人に対して、会社がその人の家族に胸を張って大丈夫ですって言えるのかってことを投げ掛けたかったっていうことですね」<sup>9</sup>

1979年3月一。

アメリカ、スリーマイル島原発で起こった事故は、大量の放射能を放出し、周辺の住民が避難するという事態を引き起こした。スリーマイルでは冷却水の喪失により、炉心が空焚き状態となり、起きるはずがないと言われていたメルトダウン（炉心溶融）が現実のものとなった。解け落ちた燃料は容器内に辛うじて留まったが、放出された放射能によって、現地では深刻な被害が十年後の今も続いている。

1986年4月一。

ソ連、チェリノブイリ原発事故。事故は、低出力での試験中に起きた。突然中性子が異常増加し出力が急上昇した。結果、核暴走を起し原子炉内の燃料が粉々になり飛び散った。

食料の70%を海外から輸入している日本。

政府は、チェリノブイリ原発の事故後、一応の基準を設けて輸入食品の放射能値をチェックし民間でも測定が続けられた。

だが、実際には輸入食品の大部分がノー・チェックで国内に流れ込んでいるのが実情である。今も我われはチェリノブイリの死の灰を食べ続けているのかもしれないのだ。

1988年6月、福島第1原発4号炉の欠陥が告白された。

その欠陥は、15年前からありながら、隠され続けてきたのである。

当時、直接設計に携わった元原子炉設計技師の田中三彦さんは、今も運転し続ける危険性について、ついに告発に踏み切ったのである。

原子炉の老朽化は年々進み、事故の可能性は増していく。また、原発労働者たちは、常に被曝の危険にさらされている。

映画は、葛西さんの疑問を中心に置きながら、原発の設計、原発労働者の被曝、使用済み核燃料の処理など原発の恐ろしい遺産について問題点をあぶり出していく。

1989年4月、広島・長崎の被爆者を追跡調査してきた実績を持つ村田三郎医師は、地元有志と共に原発労働者の被曝実態調査を行った。広島・長崎の被爆者と原爆労働者との間に共通した症状が出ていると指摘する。

<sup>9</sup> 「あしたが消える どうして原発？」製作 原発を考える映画人の会 1989年公開

ある日曜日、葛西さんは福島原発の立つ海辺の町にやって来た。小学校の頃、ここで働いていた父親と一緒にきて以来のこと。葛西さんは、父の本当の病名を知りたくて、調査中の村田医師を訪ねて来たのである。父親の残した「原発」という重荷は葛西さんにとって大きかった。

青森県六ヶ所村一。  
三沢基地に近いこの地に、今、日本中の目が集まっている。日本の使用済み核燃料の多くは、これまでフランスのラ・アージュとイギリスのセラフィールドの核燃料サイクル施設に送り、再処理を委託してきた。その再処理施設がここ六ヶ所村に建設されようとしているのである。

葛西さんの父親は、よく言っていたという。  
私たちが今の生活を維持したいのなら、いくら危険でも原発に頼るしかない。でも、本当にそうだろうか。

世界は今、脱原発の時代を迎えようとしている。  
原発を廃炉に。  
世界は明らかに原発を廃止する方向を目指し始めた。  
日本はどうか。  
現在、新たな原発を十三基建設中である。  
世界の原発のおよそ十分の一が狭い日本にある。  
日本は世界のトップクラスの電力消費国なのである。  
しかし、豊かさは真の幸せにつながるのだろうか。  
今、私たちの生き方を見直す時に来てはいないだろうか。

福島原発で万一大事故が起きたら、日本中すべてが汚染されてしまう危険がある。  
そして、その事故は明日起るかもしれない。

かけがいのない地球の、かけがいのない恵みを受け続けている私たち。  
あしたを消さないために、今、私たちには何が問われているのだろうか。

### 3. 恐れていた大惨事とその影響

2011年3月、恐れていた原発大惨事が起こった。そして、皮肉なことにこの時を機に映画「あしたが消える」の再上映が各地で行われるようになった。映画が公開された1989年には日本国内での関心が低く、沖縄を含めて全国30カ所で上映が行われたが、それだけで作品は休眠状態になっていた。

作家の広瀬隆は、25年の時を経て初めてこの映画を見た。「22年の星霜が流れるあいだに、われわれ日本人は何を忘れたのか。原発で働く被曝労働者と同じ条件で汚染地帯に、福島県内の学童が生きている今、この秘蔵されていたドキュメントは、誰の胸にも突き刺さる問いを發してくる」<sup>10</sup>

2011年8月以降、渋谷ユーロスペースでの早朝上映会が2ヶ月間の長期公開を行った。東福島第一原発事故から3年目となる現在もなお、東京都心や川崎市内での上映が続いている。また日本映画大学周辺でも関連イベントが数回行われ、市民レベルでの関心の高さを知ることとなった。

以下は、その一例とその参加者との議論の一部である。

2014年3月25日

「いま、原発を考える」

主催：地域文化団体 21紀会<sup>11</sup>

参加人数：40名

1) 記録映画「あしたが消える」(1989年制作、55分)を上映

2) 千葉茂樹監督(本校特任教授)のトーク：映画制作の経緯(前述)と制作の際の重要な3つのポイント。

- ① 原発労働者の実態を描く
- ② 原発を作る社会的メカニズムをあぶり出す
- ③ 使用済み核燃料の問題

②では、初め六ヶ所村の原発PR館も問題なく取材できたが、こちらの身分が知られると状況は一変し、尾行も付くようになった。会社の電話も、別に線を1本引かねばならぬ状況になった。3年かけて映画は完成したが、300万円は返って来ない。村田医師をはじめとする出演者への謝礼も出せなかった。当時はまだビデオではなく、16ミリフィルムでの撮影。時間と労力をかけ作りあげた作品だが上映活動は思うようにいかなかった。それが皮肉にも3.11という大惨事で生き返る。新たな配給会社がDVDに複製したのである。

3) 参加者との議論

千葉：原発労働者の問題に関して、「原発ジプシー」の歌を加藤登紀子を作ったが、発売禁止(自主規制?)になり、結局世に出なかった。

向井孝典：(元大手石油会社管理職)原発製作や定期点検の作業では、実作業に当たる人々は被曝基準量を忘れてたり、敢えてごまかして過剰に浴びることもあると聞くが本当か？」

千葉：被曝管理のルールはあるが、「満タン」になっても作業せざるをえない実態は確かにあるようで、映画にも証言が出ていた。

千葉：私は福島市出身で今も親族が市内にいるが、除染ひとつとっても、場所や状況によってさまざまであり、その受け止め方も人によって温度差がある。仮設住宅住まいの人々の意見も分かれ、「必要」「反対」が半々のようだ。

高橋尚道：(元大手ホテル施設管理部長)バス旅行で被災地に行った。「復興」で宅地

<sup>10</sup> 広瀬隆 映画「あしたが消える なぜ原発？」上映告知用チラシ 2011年

<sup>11</sup> 地域文化団体 21紀会 代表 櫃間道夫(元 気象庁技術者・管理職)

造成し、家を造っても、職場の不安がある、とのことだった。昔、津波で被害を受けた奥尻島も、結局、仕事がないと子どもたちも戻らなかったと聞く。過疎地域の復興というのは元来むつかしい。

千葉：二つの問題がある。被曝しているか否か、三陸など、被曝とは無関係な地域でも過疎。

吉田清次：（元大手総合化学会社管理部）全国に散らばった10万人規模の人々が、帰れない事実。収入も激減。チェルノブイリでも避難民の生活レベルがダウンしたと聞く。

千葉：風評被害も大きな問題だ。福島産の野菜・果物の売れ行きが大幅ダウン。リンゴなど、本来、放射線のおそれが無いものまで。それは私たちが被害者と同時に加害者だということだ。

櫃間なるみ：（主婦）同感だ、高校時代の友人が福島におり、クラスメイト数人で慰問に行った。彼は私たちを歓待してくれたが、店の女将の曰く、「これは福島産ではなく、北海道産だから安心して召し上がって」と。

千葉：福島の友人（保育園の先生）は、週一で子どもたちを山形につれて行き、思い切り野外で遊ばせるという。

小又：（元電気メーカー教材販売）私は本を書くために、原発事故の6年前から資料を集めていた。原発の「クリーン」「安い」は嘘だ。原石を採掘し、船で輸送に多大なコストがかかる。原発自体、設計施工から発電までに20年かかる。温排水も沿岸水温を5℃上げる。汚染水の漏洩も。原発推進には嘘が多い。

高橋尚道：マスコミにも問題がある。柏崎でシュラウドのひび割れ、工具の置き忘れ等、問題の軽重に無関係に騒ぎ立てる傾向がある。

滝澤 裕：（元大手自動車メーカー人事管理職）15年前、東京電力の招待で福島の第1、第2原発の見学に行った。豪華なホテルに1泊2日7000円の自己負担だった。「安全で快適な職場」説を吹き込まれた。その時、漠然と疑問も感じ、それを口にしたが、周囲からたしなめられ、そこで黙ってしまった。今にして後悔している。

高橋尚道：私も同じ事を柏崎で経験した。

諏訪澄志：（統計学研究者）タイトル「あしたが消える」の「あした」とは、葛西さんのあしたか、子どもの未来か？

千葉：このとき、タイトルの候補として30個くらい、考えたが、そう厳密には詰めていない。むしろ、「なぜ、原発が必要か」を考え、もしチェルノブイリ同様の事故が起きたら我々の未来が無くなると考えた。

秋葉晃介：（元大手電気機器メーカー技術者・管理職）原発は今ある場所だけでなく、候補の段階ではもっと多く、岩手などたくさんあった、と聞く。それが市民運動などで反対の強かった所には出来なかったようだ。当時は反対派の人は恨まれただろうが。

櫃間なるみ：（主婦）事例として新潟県巻町には、柏崎とほぼ同時進行で原発作る話があった。それが地元の反対で中止になり、それが昨年映画化された。『渡されたバトン——さよなら原発』

千葉：私の友人ジェームス三木が脚本を書いた。

大角宏之：（元郵政省総務部管理職）3.11の後、私は個人として夏の冷房は使わず、冬の暖房も極力減らす。自動車は元来持たず、生活スタイルも質素にした。

千葉：確かに「今の社会の豊かさを維持したいのなら、いくら危険でも原発に頼るしかない」と、この映画の最後で葛西が父親の言葉を借りて言っている。私もあえて言いたい一本当にそうなのだろうか？

市民のなかで、関心は続いている。

私は、同世代の市民として共に活動して行きたい。

#### 4. 平和運動家との対談

ここに一冊の著書がある。

『日本が世界を救う―核をなくすベストシナリオ―』<sup>12</sup>

著者のスティーブン・リーパー氏は、2007年から2013年まで広島平和文化センターで8代目の理事長を歴任した平和運動家でもある。通訳者としても活躍し、広島女学院大学の客員教授でもある。

著書の中でリーパー氏は次のように述べている。

「原子力発電は、まさに20世紀における権力そのものです。その構造は、原子物理学者、技術者などの僅かな特殊集団によって情報が管理され、操作されています。その組織に巨額の投資が集まり、中央集権的な力が与えられるようになっていきます。こうした権力構造は時代遅れです。21世紀では分散化や簡素化、そして立場の弱い人びとを大切にすることが当然ですから、時代の流れに反しているのです。」<sup>13</sup>

映画「あしたが消える」の上映を推進する鶴飼清・恵里香夫妻と菅又俊世<sup>14</sup>が、リーパー氏と筆者の対談をアレンジし、2014年10月23日ビデオ取材が行われた。

千葉：フクシマは現在、水の汚染で大きな壁にぶち当たっている。被災者たちの多く、約15万人は、各地に避難したままだ。

リーパー：フクシマは、チリノブイリよりも更に大きな災害であることを、世界は知ることになるでしょう。福島第一原発の事故で明らかに見られるように、原子力産業は人間の健康や地球の環境よりも自分たちの利益を優先しています。

リーパー氏と著者の結論は「健康と安全よりも利益を優先することを辞めよう」と言うものだった。それは、映画の中で葛西さんの父親が危ぶんでいたことに近いものであった。

#### 5. おわりに

25年前の映画「あしたが消える」の成果と課題がここにある。

成果としては、映画上映の再開で、市民レベルの意識が高まったことが実感出来た。

課題としては、映画の非力さと限界を痛感する。

本来は市民全体、社会自体が解決すべき大きな宿題が残っているのである。

<sup>12</sup> スティーブン・リーパー 「日本が世界を救う―核をなくすベストシナリオ―」 燦葉出版社 2014年

<sup>13</sup> スティーブン・リーパー 「日本が世界を救う―核をなくすベストシナリオ―」 燦葉出版社 2014年 25ページ

<sup>14</sup> 日本映画大学taro@eiga.ac.jp